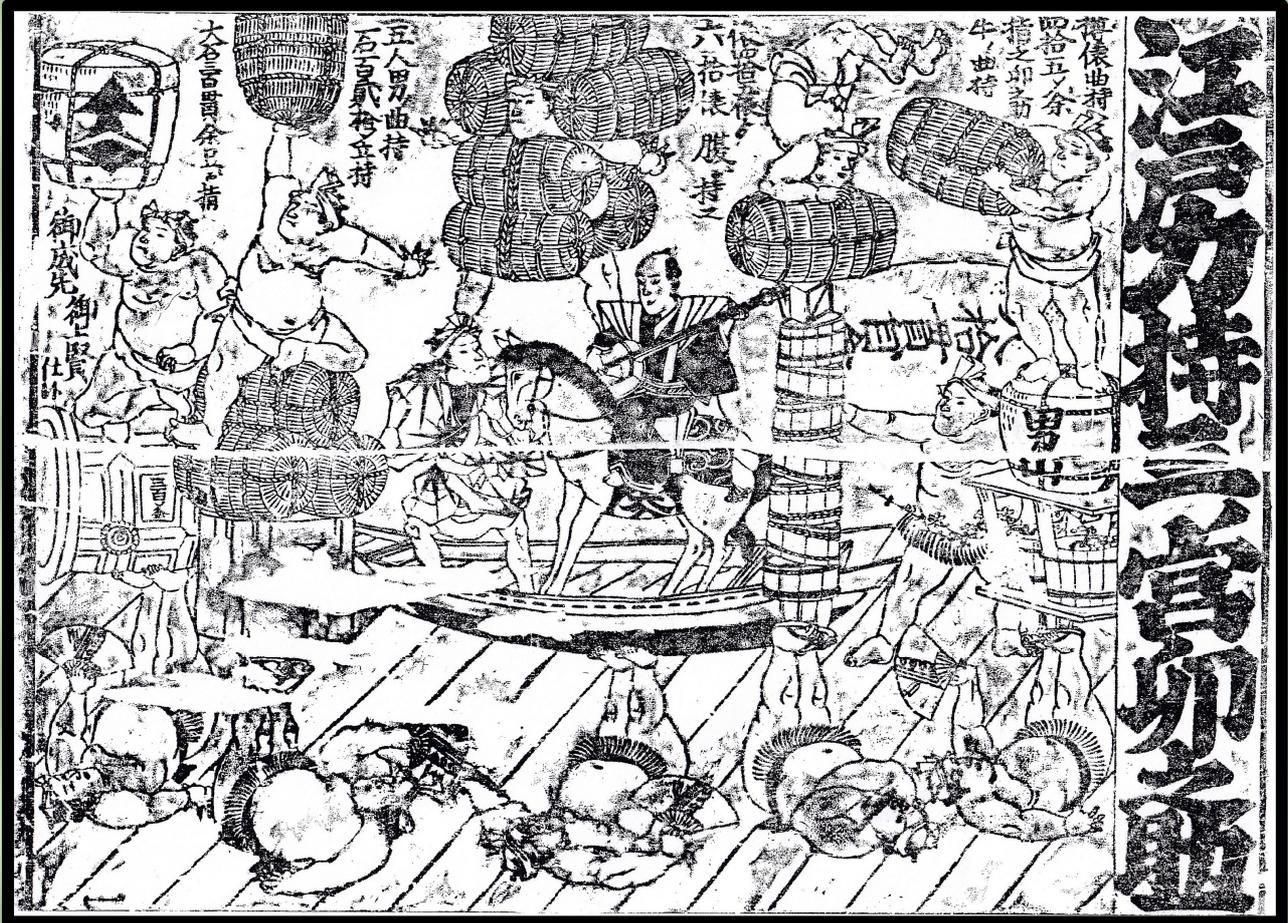


日本一の力持ち

さんのみやうのすけ

三ノ宮卯之助



図版1 「三野宮卯之助興行広告版刷」(越谷市立図書館蔵) ※ 所有機関の掲載許諾済
床上中央で仰向けになり、馬一頭とひと二人を乗せた舟を両足で持ち上げているのが卯之助



越谷市中央市民会館前庭の「三ノ宮卯之助顕彰碑」

若き日の卯之助

三ノ宮卯之助は、今から200年以上前の江戸時代、文化4年(1807)卯の年に現在の越谷市三野宮に生まれた日本一の力持ちです。当時は岩槻藩領三ノ宮です。地元では、三ノ宮卯之助に関する言い伝えが戦後まで残っていました。その言い伝えや業績について紹介します。

弱虫が…村一番の力持ちに

卯之助は生まれつき体が弱く小柄な子供でした。友だちと相撲を取っても力比べをしてもいつもビリで、みんなから「力なし」「弱虫」とからかわれていました。卯之助はあまりのくやしきから、こっそりと練習に励み体を鍛えました。やがて卯之助は相撲や力比べでは村一番に成長しました。

(※現在の三野宮は、江戸時代には「三ノ宮」や「三之宮」と書かれていました)

ある日、小舟が浅瀬に乗り上げて…



作画：高橋 誠一氏

卯之助の住む近くの元荒川で、上流から米俵を積んできた小舟が浅瀬に乗り上げて動かなくなっていました。船頭や村人たちが川に入って小舟を引いても押してもビクともしません。それを土手の上から見ていた卯之助は、川岸に降りてきて川に飛び込みました。

小舟と川底のすき間を見つけて、小舟の下へ潜り込みました。さらに仰向けになり、両手・両脚を使って小舟を川瀬から深みのある方へ何度も何度も押し、やがて小舟は浅瀬を離れることができました。

かけ出しの頃の卯之助

三ノ宮橋そばに住んでいたため、三橋卯之助(さんのはし うのすけ)と呼ばれました。

文政8年(1825)、卯之助数え年19歳の時、岩槻藩領の飛び地、太田袋おたぶくろ(現在の久喜市太田袋)の琴平神社で、卯之助の師匠となる長宮村ながみや(現在の春日部市長宮)出身の肥田文八ひだぶんぱちなども加わって、五十貫目(約200kg)の力石を奉納するために持ち上げています。

表紙「江戸力持三ノ宮卯之助」(図版1) 版木の発見

昭和26年(1951)、郷土史家で旧大袋村(現在の三野宮・大道・大竹・恩間・袋山・大林・大房)村長の瀬尾哲太郎氏から高崎力氏に『浮世絵を見せる』との連絡があり、高崎氏は三野宮の農家に行くことになりました。版木は、まな板代わりに使用されていたので、裏面は包丁の傷だらけで、表側の中心部は横一線にひび割れし、見たことのない人の群像が陽刻されていたとのこと。

越谷における卯之助

舟荷人足で力をつける

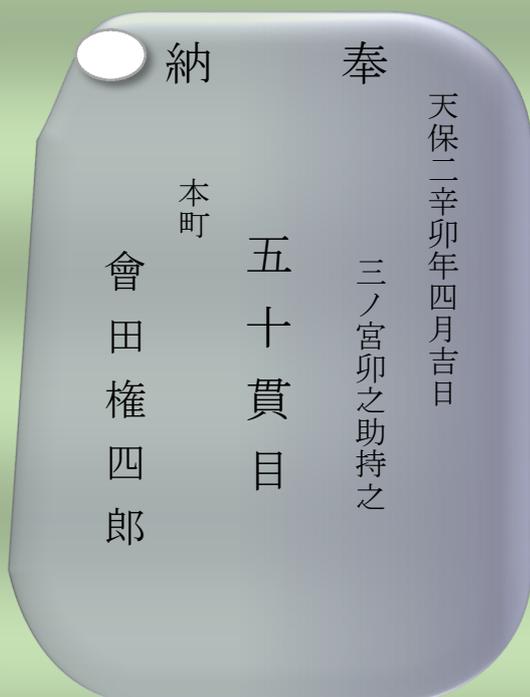
越谷の瓦曾根溜井には、江戸時代、元荒川の瓦曾根溜井堰と中土手があり、中土手には河岸場かしばがありました。そこで働く舟荷人足たちの間で、力石を使っての力比べが行われていたと思われます。その中に三ノ宮卯之助もいて、ここで力をめきめきとつけていったと考えられます。

瓦曾根の照蓮院そばの観音堂(かつての最勝院)境内には、卯ノ助が持ち上げた力石があり(現在は行方不明)、当時の溜井の河岸場で働く人足も含めた力比べの名残と思われる。その影響からか観音堂では古くから相撲大会が開催され、以前は現役の力士も招待されました。

久伊豆神社の奉納力石

天保2年(1831)4月、越ヶ谷町の久伊豆神社では、本町の会田権四郎ごんしろうによって取り仕切られた勸進奉納力持の興行が行われました。神社には卯之助の名が刻まれた力石が現在も残っていて、大事にされています。

秋祭りなどでは、台座に載っている卯之助の力石の周辺には大幣おおぬさや榊さかきが飾られ、その前で神職が祝詞をあげ、お祓いをする所となっています。



御上覽力持興行

天保四年（一八三三）六月の
御上覽力持興行の引札（宣伝チラシ）

図版 2

高島 眞助・高崎 力
(2004)「図 3.御上
覽力持」より引用



中央で仰向けになり足指あしさしをしている人物が卯之助。枕の下に「卯之助」の文字が見られる。

いよいよ 将軍の御前にて

天保2年(1831)、越ヶ谷の久伊豆神社では勸進奉納力持の興行が行われ、その翌年に春日部市粕壁東にある八幡神社にて、力石 百貫(375kg)と六十貫(225kg)を持ち上げるなど、卯之助が頭角を現した頃だと思われます。

天保4年(1833)、江戸深川の八幡神社境内で御上覽力持の興行が行われ、第11代将軍徳川家斉いえなりの御前で、卯之助は芝大木戸の仙太郎とともにその栄を受けました。上の図版 2 はその時の様子しほがわかる引札ひきふだ(宣伝ちらし)です。岩槻藩領長宮村ながみやの肥田文八(卯之助を育て上げた師匠)らを含めると45名に上る競演でした。

卯之助一座はこの後、興行の旅に出ました。

遠くは兵庫県姫路市

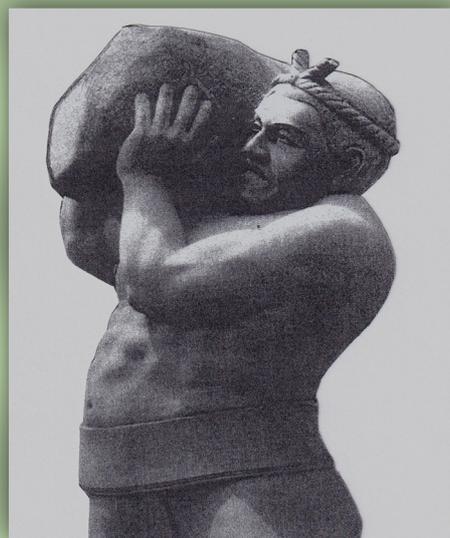
巡業先の卯之助

卯之助一座は甲州街道を進んで巡業の旅に出て、天保9年(1838)、信州(長野県)の諏訪大社秋宮にたどり着きここで卯之助は力石七十貫(262kg)を持っています。

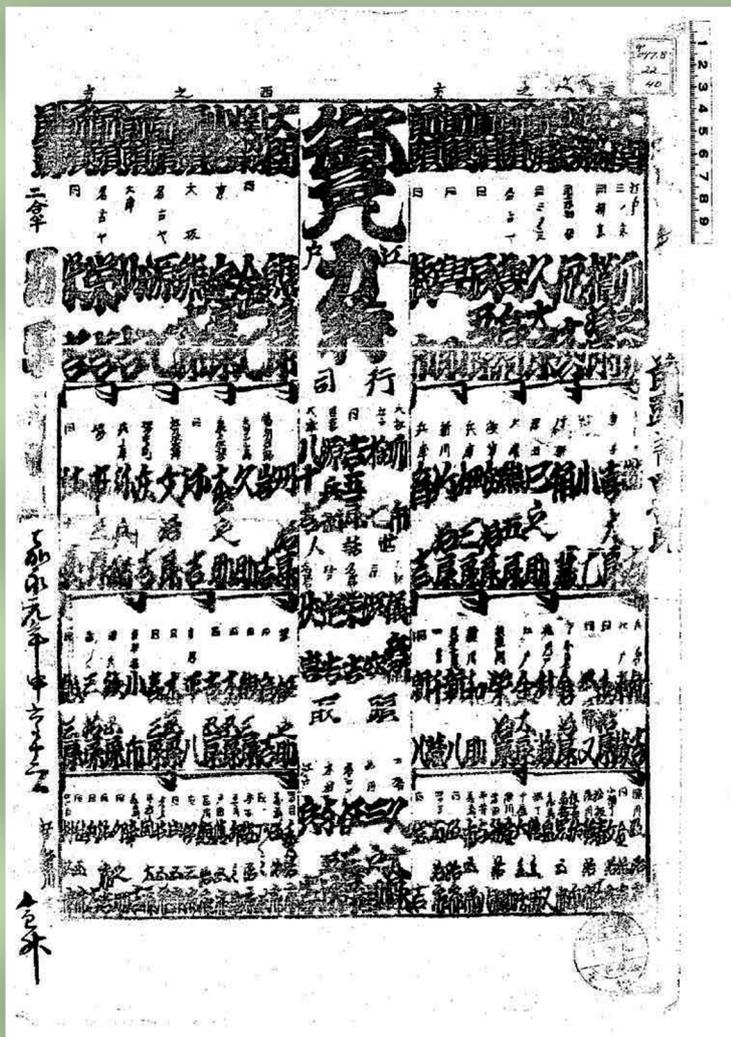
その後、名古屋大須を経て天保11年(1840)の大坂興行、そして最終的には姫路市にある魚吹八幡神社での力石奉納と続きます。

その興行について高崎力氏は、次のように推測しています。『大坂の天満宮での卯之助一座の力持の様子を見た網干の船頭達が、江戸力持を網干に招待して、魚吹八幡神社の祭礼に華を添えようと、卯之助一座を大坂からの船頭達の帰り舟に乗せて網干に戻り、船乗りや地元力持を集めて奉納力持を開催した』

なお、その後の卯之助一座の足取りは不明です。現在、魚吹八幡では地元の人によって石像が設置され、足元には卯之助の力石が置かれています。



魚吹八幡の卯之助石像
(撮影:高崎氏、一部加工)



← 江戸時代は大関が最高位

← 筆頭に卯之助の名がある

図版3 『力持番付』(嘉永元年)
(山梨県立博物館所蔵)

※ 所有機関の掲載許諾済

卯之助の力石38個

[1] 稲荷神社(埼玉県桶川市寿)	1	桶川市指定文化財
[2] 飯塚神社(埼玉県さいたま市飯塚)	1	
[3] 神明神社(埼玉県さいたま市釣上)	2	
[4] 香取稲荷神社(埼玉県さいたま市新方須賀)	1	
[5] 香取神社(埼玉県越谷市三野宮)	4	越谷市指定文化財
[6] 個人宅(埼玉県越谷市三野宮)	1	越谷市指定文化財
[7] 久伊豆神社(埼玉県越谷市越ヶ谷)	1	越谷市指定文化財
[8] 観音堂(埼玉県越谷市瓦曾根)	1	所在不明
[9] 峯ヶ岡八幡神社(埼玉県川口市峯)	1	
[10] 氷川神社(埼玉県戸田市上戸田)	1	
[11] 東八幡神社(埼玉県春日部市粕壁東)	2	
[12] 大門神社(埼玉県さいたま市大門)	1	
[13] 琴平(諏訪)神社(埼玉県久喜市太田袋)	1	
[14] 観蔵寺(千葉県木更津市中里)	1	
[15] 北野神社(東京都江戸川区北小岩)	2	
[16] 川崎大師平間寺[へいけんじ](神奈川県川崎市大師町)	1	
[17] 若宮八幡神社(神奈川県川崎市大師駅前)	1	
[18] 山田神社(神奈川県横浜市都筑区南山田)	1	
[19] 杉山神社(神奈川県横浜市都筑区大熊町)	1	
[20] 諏訪神社(神奈川県横浜市港北区網島東)	4	
[21] 稲荷神社(神奈川県鎌倉市雪ノ下)	2	
[22] 江島[えのしま]神社(神奈川県藤沢市江の島)	1	
[23] 稲積神社(山梨県甲府市太田町)	1	
[24] 諏訪大社秋宮(長野県下諏訪町)	1	
[25] 大阪天満宮(大阪府大阪市北区天神橋)	1	
[26] 魚吹[うすき]八幡神社(兵庫県姫路市網干区宮内)	2	
[27] 合力[ごうりき]稲荷神社(東京都台東区浅草)	1	
総計	38個	

卯之助の最期 (地元の三野宮の言い伝え)

江戸にいる関西の大名が、大坂方の力持ち 1 位の力士と江戸方の力持ち 1 位の力士を対決させるために、江戸の大名屋敷に呼び寄せて試合をさせました。その結果、卯之助が勝ちました。こうして、日本一決定戦は、江戸方の力持ちが勝利し、卯之助は事実上の日本一に決まりました。

その夜、決定戦が行われた大名屋敷で、双方の力士を交えて祝いの酒盛りが催されました。卯之助は酒盛りを終えて自分の道場に帰る途中、道端で突然苦しみ出し、悶え倒れてその場で息絶えました。このような突然死だったため、死因は食中毒とも毒殺とも言われています。

なお、戒名に「とうさつせいしんじ剎清仰土」と書かれた位牌が残されています。ちなみに、「仰」は「信」の異体字で、「清信土」は位号です。

卯之助の位牌に関して高崎つとむ力氏は次の様に述べています。「越谷駅前(現在の東口)に疎開していた荻野氏が、東京に帰ることになった昭和23年頃に、位牌を卯之助の末裔むかさにあたる向佐家に渡したと聞く。荻野氏の先祖は卯之助のマネージャー役だったのではないだろうか。」

三ノ宮卯之助 力石 の所在地



※ 出典：
 国土地理院
 「地理院地図 Vector」
<https://maps.gsi.go.jp/vector/>
 を加工して作成しました。

※ 地図中の「番号」は、
 p. 6 の「卯之助の力石 38 個」
 の「番号」に対応しています。

※ 「NPO 法人越谷市郷土研究会」のホームページ <http://koshigayahistory.org/>
 においても、この「三ノ宮卯之助 力石の所在地」の地図が、
 現地をご訪問される際にとっても便利な「Google マイマップ」で閲覧できます。

三ノ宮卯之助の年表

(数え年)

文化	4年(1807)	1歳	岩槻藩領三ノ宮村(現・越谷市三野宮)に生まれる
文政	8年(1825)正月	19歳	師匠の肥田文八(岩槻藩領長宮村)と久喜市太田袋の諏訪神社にて力石 五十貫 を持つ
文政	12年(1829)	23歳	本郷の小島久蔵と越谷市瓦曾根の最勝院[戦後廃寺]観音堂[現・照蓮院駐車場]にて力石 七十貫余 を持つ 小島久蔵らと岩槻藩領飯塚村の飯塚神社にて奉納力石を持つ
文政	13年(1830)3月	24歳	小島久蔵と岩槻藩領の釣上の神明社で「雲龍石」等を持つ
		10月	小島久蔵と江戸下町にて力石 五十貫余 を持つ この力石は現在、木更津市中里の観蔵寺にある
天保	2年(1831)4月	25歳	越ヶ谷久伊豆神社にて力石 五十貫余 を持つ(勸進奉納力持興行)
		4月	芝大木戸の仙太郎と横浜市港北区網島東の諏訪神社にて「飯田石」「池谷石」等を持つ
天保	3年(1832)2月	26歳	春日部市粕壁東の八幡神社にて力石 百貫と六十貫 を持つ
天保	4年(1833)6月	27歳	卯之助が芝大木戸の仙太郎とともに深川の八幡宮境内にて第11代将軍家斉のもとで御上覧力持の栄を受ける
天保	7年(1836)6月	30歳	江戸力持番付で西の関脇となる
天保	9年(1838)4月	32歳	長野県下諏訪の諏訪大社下社秋宮にて力石 七十貫 を持つ
天保	11年(1840)2月	34歳	大阪市の大坂天満宮にて「大盤石」を足指し(あしさし)
嘉永	元年(1848)2月	42歳	この頃、卯之助の小舟に牛一頭を乗せた曲指しが評判となる
		3月	出身地の三之宮香取神社にて「大盤石(だいばんじゃく)」「三王石」などを持つ 「白龍石」は翌年の嘉永2年か
		3月	岩槻藩領大門の大門神社で「大王石」を持つ
		6月12日	江戸力持ち番付で東の大関となる 山梨県甲府市の稲積神社にて力石 百二十貫 (450kg)を持つ
嘉永	5年(1852)2月	46歳	桶川市寿の稲荷神社にて「 大盤石 」(610kg・ 日本一の重さ)を足指し(あしさし・仰向けになって両足両手でさし上げる)
嘉永	7年(1854)7月8日		卯之助 江戸にて死亡(数え年 48歳)、死亡地・埋葬地とも不明

※ **一貫** = 3.75kg

○このパンフレットの出版につきましては「越谷しらこぼと基金」の助成を受けました。

出典(1) 高島 慎助・高崎 力(2004)「<論説>三之宮卯之助の力石(2)」『四日市大学論集』第17巻1号 四日市大学学会 pp.45-76

出典(2) 高島 慎助・高崎 力(2004)「<論説>三之宮卯之助の力石(2)」『四日市大学論集』第17巻1号 抜書 pp.45-76 附属2ページ

加藤 幸一が p.1~6, p.8 の文章の執筆を行いました。出典(1), (2)に掲載の図版1, 2, 3に関して、図版1, 3は所有機関の掲載許諾済の引用、図版2は出典(1), (2)から直接引用致しました。

三之宮卯之助の研究に多くの成果を残された高崎 力氏に、この場をお借りして敬意を表します。

編集責任：秦野 秀明

発行 2021年9月 NPO 法人越谷市郷土研究会 会長 渡邊 和照

編集委員 秦野 秀明(編集長)・大内 登・加藤 幸一・関根 芳孝・土屋 孝子

印刷 三光堂印刷所(越谷市大沢1丁目15-14)